

色んな懷疑に耽るようになった。

僕の脳漿は水氣を失つて了つたのかも知れない、自分の年齢が三十七だなどゝ思へて來たりした。

僕の弟は死んでは居ないのだ。

無想庵のところに逢つた改造社の小僧だと言つたあれが僕の弟ではなかつたのか。

春子も實際は僕の姉が、變装してゐたのかも知れない。

此んな風に僕は思つたりしたのだ。

「高橋君、喉が乾いたら今お母さんが赤い密柑をドツサリ籠に入れて持つて來られよるからな」
巡查部長が、僕がやかましく騒いでゐると、やつて來て氣嫌をとつた。

彼は今やつと正氣に歸つたようだ。

彼の兩肺は腐つて用をなさなくなり、心臓は血液がぼるような吼だらけになつた今、彼が自己を願ひ見る様はいたましい。